

# 何香凝の日本留学の意義

女子美との邂逅を中心に

▶ 稲木吉一

## 1. はじめに

「女子美、こと女子美術大学は、1900(明治33)年に設立された私立女子美術学校を前身とし、2020(令和2)年に創立120周年を迎えた。この間の女子美の沿革を顧みると、21世紀のグローバル時代にある今日と同様、創立後20世紀の半世紀近くにわたって、多くの海外留学生、とりわけ中国人留学生を迎え入れていたことが改めて思い起こされる。1900年代前後、隣国中国は清朝末期・中華民国建国期にあたり、清朝の近代化運動および革命運動において、明治維新でいち早く近代化をとげた日本を第一モデルとして学ぼうとする機運が起こり、欧米以上に日本が中国の若者の留学先となって、1905年には日本留学者数は1万人を超えたという<sup>1)</sup>。

女子美は、同時期に創立された東京女医学校(現・東京女子医科大学)、日本女子大学校(現・日本女子大学)と並んで、当時、中国人女子留学生を多く受け入れた私立学校であったことが指摘されている<sup>2)</sup>。女子美は、近代日本の女子高等教育機関の一役を担ったのみならず、創立間もない時期から、留学生を受け入れ卒業生を輩出してきた。その代表的な存在が、何香凝(1878-1972)である。

何香凝は、清国・中華民国・中華人民共和国と移行行く激動の中国20世紀を、革命家・政治家であると共に、画家・芸術家として生き抜いた近代中国を代表する人物で、1997年には中国で初めて個人の名を冠した「国家級」(国立)の美術館として、中国浙江省深圳市に何香凝美術館が設立されるほどの存在である。そうした彼女の94年<sup>3)</sup>の人生を決定づけたのが、1903年以降、20代半ばから30代前半までの8年以上に及んだ日本留学経験であったといっても過言ではない。

しかしながら、後年、何香凝自身が留学時代の様子について語るところは、夫の廖仲愷(1877-1925)とともに孫文(1866-1925)の革命運動に同志として参画していた、いわば辛亥革命前夜の内容が大半を占めている。それに対して、何香凝の画家としての原点とも言える、日本で受けた美術教育に関する言及は、残念ながらきわめて乏しい。日中国

交正常化直前に死去した何香凝の政治的態度として、生前、日本に関する発言が限られた範囲に止まったのは致し方ないが、代わって娘・廖夢醒、息子・廖承志の回想録がいささかその欠を補っているのは幸いといえる。

近年、何香凝美術館が設立されたのを機に、中国において何香凝に関する研究は一気に進展した感がある。筆者は、2017年9月、日中国交正常化45周年を記念して『何香凝芸術名作展』が上野の森美術館と女子美術大学美術館(JAM)で開催された際、女子美側の作業に携わった縁で、何香凝美術館から依頼を受け、2020年度『何香凝美術館刊』総第2期に「(邦題)何香凝と女子美術大学」と題する文章を寄稿した<sup>4)</sup>。そこでは、これまであまり触れられてこなかった、何香凝が女子美で学んだ当時の教育環境や、女子美で学ぶようになった経緯について、女子美術大学に伝わる資料をもとに検証を試みた。

本稿は、「何香凝と女子美術大学」脱稿後、何香凝の女子美入学にいたる機縁等の問題に新知見を得たので、改めて何香凝の女子美入学の契機や日本画学習をめぐる問題を通して、何香凝の画家としての原点である日本留学の意義を探ってみたい。

## 2. 女子美以前の何香凝

何香凝(カ・コウギョウ He Xiang-ning)、本名は諫、またの名を瑞諫。1878年に香港の裕福な家庭に、男3人、女9人の12人兄弟・姉妹の中で9番目の子として生まれた<sup>5)</sup>。1897年18歳で、後に「中国革命の父」孫文の片腕と呼ばれることになる廖仲愷と結婚。夫は1877年米サンフランシスコ生まれの、広東省恵陽に本籍を持つ客家人であった<sup>6)</sup>。

時あたかも日清戦争(1894-1895)敗北後、清朝は内憂外患の状況下にあつて、多くの若者たちが各々国家再興の道を模索していた。1896年清朝政府が13名の官費留学生を派遣したことが契機となり、その後、明治維新をモデルに政治改革を推進しようとした変法自強運動<sup>7)</sup>の影響で、日本に渡航する官費・私費留学生は年々増加の一途をたどった。

廖仲愷も祖国再興に身を投じようと日本留学を強く希望し、志を同じくする何香凝は嫁入り道具を売って費用を工面し、2人して日本に渡るようになった。夫の廖仲愷に少し遅れて1903(明治36)年初め、何香凝は初来日を果たすと、まず日本女子大学校に入学、日本語の勉強にも勤しんだ。同年6月、何香凝は江蘇省出身の留學生が発行していた雑誌『江蘇』第4期に「敬んで我が同胞姉妹に告ぐ」という文章を発表して、女性、特に中国人女子留學生に対し、天下の興亡については国民一人一人に責任があり、国家の再興のために立ち上がるよう、呼びかけている<sup>8)</sup>。これに関して、後に何香凝は、結婚後、廖仲愷が時事に関して語るのを聞く中で「国家の興亡には匹夫も責有り」という認識を持つにいったと述べている<sup>9)</sup>。女性にも男性とともに国家再興のため尽力する責任があるとの主張は、単なる夫唱婦随を超えて、生涯を通じて男女平等、女性解放を目指した何香凝自身の女性観を示すものとして注目されよう<sup>10)</sup>。

そして同じ1903年9月、何香凝と廖仲愷は、革命同志が集う集会で日本亡命中の孫文と出会い、その後、孫文の下宿を度々訪ねてその思想に触れ、革命運動に奔走するようになった。

翌1904年春、何香凝は第一子出産のため一旦帰国するが、生まれたばかりの娘・廖夢醒を実家に預けて再来日。革命運動を復活させるが、1905年7月、ヨーロッパから戻った孫文が日本を革命の本拠地と定め、8月に東京で革命組織を糾合した中国同盟会(後の中国国民党)を結成すると、何香凝はいち早く参加し、同盟会最初の女性会員となった<sup>11)</sup>。

ちなみに学業では日本女子大学校に戻らず、改めて東京女子師範学校予科に入学し(入学年不明)、同校を1906(明治39)年秋に修了した。翌1907年4月に再び日本女子大学校教育部(博物科)に入学するが、胃潰瘍と出産が重なり9月に退学、同月第二子の息子・廖承志が生まれている。そして翌1908年2月より日本画家の田中頼璋の画塾で日本画を学びはじめ、さらに翌1909年4月から女子美術学校に入学して本格的な日本画学習に取り組むこととなった。

### 3. 女子美での学び

私立女子美術学校(以後、女子美と略称)は、1899(明治32)年8月の私立学校令に基づき、1900年10月に各種学校として認可・設立され、1901(明治34)年4月に開校し

た。私立学校は、言うまでもなく公教育を補完する教育機関であり、各種学校は当時、公的學校体系の枠外にある、様々な形態・内容をもつ諸學校の総称である。明治時代、尋常小学校を義務教育とし、その後の中等および高等教育は官立・公立の他、多くを私立の學校が担った。日本で古い歴史をもつ、特に明治時代に女子教育の先駆的役割を果たした重要な教育機関の多くが、女子美を含めて私立の各種學校として出発している<sup>12)</sup>。

女子美創設は、幕末維新期を代表する思想家横井小楠を義父とする横井玉子(1854-1903)の尽力によるものであり、医家の名門・順天堂を興した佐藤家出身の佐藤志津(静子)(1851-1919)によって今日にいたる発展の礎が築かれた<sup>13)</sup>。

何香凝が女子美に入学した1909(明治42)年は、志津が女子美の校主・2代目校長として學校運営にあっていた時期で、一つの節目の年でもあった。前年10月13日夕刻に創立以来の本郷弓町校舎が火災で焼失、翌1909年、校地を本郷菊坂町に移して再出発を切る。現在の杉並区和田に移転するまでの約25年の間、世に広く女子美の名が知れ渡るようになった「菊坂の女子美」の始まりである。何香凝はその第一期生の一人となった。

なお同年、女子美開学以来、2度目となる学科課程の改訂があった。前稿<sup>14)</sup>では、そのことが、何香凝が女子美に入学する一つのきっかけになった可能性があることを指摘した。1909年度に改訂された『女子美術學校規則』(以下『規則』、女子美術大學歴史資料室所蔵)をもとに、何香凝入学時の専攻学科の編成やカリキュラムの内容を確認しておきたい。

女子美で学べる専攻学科には、日本画・西洋画・彫塑・蒔絵・刺繍・編物・造花・裁縫の正科8科に、別に料理科を加えた9科があった。日本画・西洋画・彫塑・蒔絵は美術・工芸系学科、刺繍・編物・造花・裁縫は手芸的要素の強い家政系学科にあたる。後者の教科は、女子に対し良妻賢母養成とともに、女子の手に職を付けさせ、自立を促すために設けられた面も強く、それが女子美の特色でもあった<sup>15)</sup>。

正科8科には各々、本科普通科(4ヶ年)・同高等科(3ヶ年)、撰科普通科(3ヶ年)・同高等科(2ヶ年)、研究科(1ヶ年)が設けられ、日本画・西洋画・刺繍・編物・造花・裁縫の6科には高等師範科(3ヶ年)、編物・造花には別科(3

ヶ年)、さらに編物には速成科(5ヶ月)のコースがあった。

日本の学制において「本科」は学校の本体をなす課程で、撰科は女子美の場合、専門である実技教育に特化した課程となる。また今日の教育水準からすると、普通科は中学校(前期中等教育)、高等科は高等学校(後期中等教育)、研究科は専門学校(高等教育の一部)にほぼ相当する。

なお女子美の授業時間は、本科高等科で平日およそ6時間(午前8時始業、午後3時以後放課後)、土曜日4時間の、計週34時間。撰科高等科の場合、時間数は一律ではなかった。

以下は、何香凝が入学した時点での、「日本画撰科高等科」のカリキュラムである。

#### 【日本画撰科高等科】

##### 1学年目

実技(臨画、写生、新案)	週25時間
芸用解剖(骨学、筋学)	週5時間
修身(人倫道徳の要旨)	週1時間
刺繍・造花・裁縫・袋物・編物(実習)	週6時間
*刺繍・造花・裁縫・袋物・編物の課程	
から希望によって1課または2課を兼修	
	計37時間

##### 2学年目

実技(臨画、写生、新案)	週26時間
芸用解剖(靱帯及作用)	週2時間
刺繍・造花・裁縫・袋物・編物(実習)	週6時間
*同文	
	計34時間

ここで、日本画撰科高等科(修業年限2年)と本科高等科(同3年)<sup>16)</sup>のカリキュラム上の違いを整理しておく。

- ・「実技」では、撰科高等科にはない(図案)が、本科高等科2年次と3年次に加わる。
- ・「芸用解剖」は、両科同内容で、授業時間数に違いがある。本科高等科では各学年週1時間の授業で、履修に1年分の差があるが、総時間数は撰科高等科がはるかに多い。よって撰科高等科は実技教育に特化したカリキュラムといえる。
- ・座学としては、撰科高等科には1年次の「修身」のみ。本科高等科では3年間「図学」と「倫理学」(1年次の内容は撰科の「修身」と同じ)、2年間「美術史」と「英

語」、1年間「国語」と「美学」の講座が設けられていた。本科高等科は、実技に加えて、美術理論や倫理学、国語、英語の授業を通じて、教養を高める高等教育に寄与するカリキュラムとなっている。

- ・撰科高等科では、「刺繍・造花・裁縫・袋物・編物」の課程(実習)を希望により1課か2課、2年間にわたり週6時間、兼修することが、創立以来、2度目の学科課程の改訂でカリキュラムに盛り込まれた。

上記のカリキュラムは、何香凝が入学した1909年から始まったもので、前年までは臨画、写生、新案の実技科目と芸用解剖(美術解剖学)のみのカリキュラムであった。学科課程の改訂は、弓町校舎の焼失後、菊坂校舎への移転建設に伴う経済的な要請(授業料値上げ)ともリンクしたものであるが、女子美にとって女性の自立を促す刺繍以下、手芸的要素の強い家政系学科の兼修は、次章で述べるように、何香凝が女子美に入学する理由の一つになったと考えられる。

## 4. 女子美入学の経緯 その1

何香凝の子息で、1972年の日中国交正常化に大きな功績をはたし、1963年中日友好協会設立以来、死去するまで会長を務めた廖承志(1908-1983)は、回想録に「もともと、母が絵かきになるなど、彼女自身、思ってもいなかったことである。(中略)孫中山は中国国内で武装蜂起をしなければならぬとし、その時に使う軍旗や告示のデザイン、軍票の図案などを準備することになった。その企画制作を担当する者が要る。そこで母が、東京上野の美術学校に入ることになった。また、父も熱心に絵の勉強をすすめたので、彼女は本式に学び始めたのである。絵の修業をする一方、母は武装蜂起用の軍旗のデザインに参画したり、その刺しゅうまでやった。このときから、母はそれまで予期しなかった絵を描くようになったのである」と述べている<sup>17)</sup>。

これを文字どおり受け取ると、何香凝が絵を嗜むようになるのは、孫文が中国国内で武装蜂起を組織するにあたって、軍旗や住民への告示用のデザイン、軍票の図案などを企画制作する人物として、何香凝に白羽の矢を当てて、「上野の美術学校」に入学してからのことで、それまで絵を描くこともない、いわば美術には素人であったような書きぶりである。これは話の巧みなことで知られる廖承志が、ややドラマティックに述べたままで、さらに女子美のことを「上野

の美術学校」と記しているのも当然、鷗呑みにはできない。

とはいえ、事実、何香凝の回想録にも、留学中、革命のための蜂起軍の旗や符合等の一部は孫文の指導のもとに絵を描き、刺繍や縫製したとある<sup>18)</sup>。すなわち何香凝が女子美に入学したのは、革命運動の一環として、孫文の要請に基づくものであり、女子美では刺繍や縫製等の手芸技術も学んだ様子を窺い知ることができる。

先述したように、折よく何香凝が女子美に入学した年に、日本画学習とともに、刺繍・造花・裁縫・袋物・編物の家政系学科を兼修できるカリキュラムが新設されたことは、入学の動機付けとして十分な理由となろう。

さらに、女子美への入学が、孫文の要請であった点を鑑みると、女子美と何香凝を結ぶ人的繋がりも浮かび上がってくる。

他方、女子美に入学したのとほぼ同時に何香凝が絵を学ぶようになったという説明に関しても、検討を要する。というのも、女子美入学以前から、何香凝は日本画家・田中頼章の塾で日本画を学んでいたからで、何香凝が日本画を学ぶようになった経緯についても留意する必要がある。

以上の観点から、さらに何香凝が女子美に入学した契機について探ってみたい。

## 5. 「学籍簿」から見た何香凝

女子美術大学には女子美開学当初から学生の『学籍簿』が保管されており、以下に何香凝の『学籍簿』の記載内容を紹介する。

[姓名] 何香凝  
[生年月日] 光緒八年四月廿七日生  
[原籍] 清国広東省広州府南海県人  
[誰子] 何炳垣之女<sup>19)</sup>  
[父兄職業] 商業  
[寄留所] 府下淀橋町字柏木三百五十二番地  
[本人トノ関係] 貸家  
[転居地] 本郷区真砂町十五番地 勵志學舎  
[年月日] 明治四十二年七月九日転居  
[入学日] 明治四十二年四月十日 入学  
[入学前ノ履歴]  
明治四十年四月日本女子大学校教育部ニ入りシガ病気の為同年九月退校  
明治四十一年二月ヨリ田中頼章氏につき日本画研究。

[学科名] 日本画科撰科高等科  
[入学級] 一学年  
[進級] 二学年  
[年月日] 明治四十三年四月 日 進級  
[退学日] 明治四十四年三月 日 退学  
[退学ノ理由] 卒業  
[保証人] 大清公使館

上記『学籍簿』によると、何香凝は1908年2月より田中頼章(1866–1940)に師事して日本画研究を行い、1909(明治42)年4月10日、女子美術学校日本画撰科高等科に入学、本校を1911(明治44)年3月に卒業した、とある(文書の書式上「卒業」が「退学」扱いとなっている)。

何香凝が師と仰いだ田中頼章に関しては後述するとして、ここでは、1903年に受け入れを始めて以降、何香凝が卒業する1911(明治44・辛亥革命年)年3月までの8年間に、女子美で学んだ中国人留学生の実態について、先行研究をもとに探ってみよう<sup>20)</sup>。

上記期間内の入学者は、何香凝入学前に45名、何香凝が卒業する1911年までに13名、都合58名を数える。途中、2度にわたる専攻学科の再編や修業年限、入学資格要件等に変更があるが、中国人留学生が入学した専攻学科を人数の多い順に記すと、西洋画科21名(卒業者2名)、編物科17名(9)、刺繍科13名(7)、造花科7名(4)、日本画3名(1)である(専攻学科不明者1人。なお入学者人数は、途中で転科または再入学した者3名の転科・進学先の4専攻学科も加えた延べ61名分となっている)。西洋画の志望者が多いのは、当時の留学生にとって、西洋文明の摂取により近代化を進めた日本が、東アジア圏で唯一本格的な西洋画に接することのできる擬似西洋の様相を呈していたことが関係するであろう。

なお実数58名の入学者のうち「卒業(修業)」が判明しているのが23人、退学者24人、不明11人。退学者の割合が高く、卒業者が少ないのは、当時はまだ中国人女子留学生は父兄や夫ら家族に付き添って来日した「随伴留学生」が多く、自らの意思で勉学を続けることが困難な状況にあったことが想定される<sup>21)</sup>。

この期間に本科に進んだのは2名(西洋画科普通科、造花科普通科)のみで、共に卒業している。それ以外は編物科速成科3名(同一人物が卒業後に同専攻の別課程を修業しており、実数2名)を除いて、何香凝を含めすべて撰科に入学

している。一般的に留学生には語学の壁があり、美術理論や教養系の講義科目を必修とする本科は敬遠されがちで、実技優先の撰科が選ばれたものと見られる。

また、前述したように、日本の学制上、普通科は今日の中学校、高等科は高等学校及び専門学校に相当しており、高等科に入学したのは1名のみで、速成科3名(実数2名)を除いてその他55名は普通科に入学している。実に留学生として初めて高等科に入学した1名こそ、何香凝に他ならない。

何香凝は、すでに日本女子大学校や東京女子師範学校で学んでおり、実技に関しても女子美入学前から田中頼璋の画塾で学んでいた。撰科であっても普通科ではなく高等科に入学したことは、学力、実技力ともに問題のない能力を身につけていたのであろう。

ちなみに高等科は基本的に普通科卒業生を入学対象としており、おおむね16から17歳以上に入学資格が与えられた。また、普通科の入学資格は1909年以降12歳以上、それ以前は14歳以上とされていたが、当時の撰科で学んだ中国人留学生は、15歳から30歳まで幅広い年齢にわたっていた。

何香凝自身も1909年の入学時には30歳であったが、『学籍簿』には生年月日を「光緒8(1882)年4月27日生」と、実年齢より4歳ほど若く記してある。周囲の学生より年高がいていたので、いわゆるサバを読んで若く書き記したとみられている<sup>22)</sup>。

## 6. 女子美入学の経緯 その2

前章で触れた、女子美が受け入れを始めた1903年以降、何香凝卒業時の1911(明治44・辛亥革命年)年3月までの中国人留学生58名の中で、注目されるのが鮑桂娥と廖氷筠の2名である。

まず、後者の廖氷筠は、何香凝の夫・廖仲愷の従妹<sup>23)</sup>で、『学籍簿』によると何香凝入学の前年1908年に刺繍科撰科普通科に入学し、1910年3月卒業している<sup>24)</sup>。入学時10歳の廖氷筠の場合、革命運動に与したのではなく、純粋に将来に向けて刺繍という手芸技術の習得を目指したものとみられる。廖仲愷・何香凝夫妻にとって、すでに親族の一人が女子美に籍を置いていることは、女子美に対し、認知度も高く親近感を抱いていたことがうかがわれる。

さらに、廖氷筠入学の前年、女子美に入学しているのが鮑桂娥である。『学籍簿』によると、1889(明治22)年5月

30日生。広東省香山県出身、茶商・鮑滔宗の長女とある。正確に言えば、鮑桂娥は中国人留学生ではなく、すでに横浜で茶商を営んでいた華僑の子女ということになる。1905(明治38)年12月横浜大同学校卒業後、18歳になる1907年から11年まで都合4年間、以下のとおり、編物および刺繍の分野で複数の課程に入学、卒業している。女子美に入学した留学生は中途退学するものが多い中で、最初に卒業した人物でもある<sup>25)</sup>。

1907(明治40)年3月	編物科撰科普通科	入学
1909(明治42)年3月	同上	卒業
1907(明治40)年5月	編物科速成科	入学
1907(明治40)年11月	同上	終業
1907(明治40)年12月	刺繍科撰科普通科	入学
	刺繍科撰科高等科	進級
1911(明治44)年7月	同上	卒業

女子美入学前に鮑桂娥が通った横浜大同学校は、孫文、梁啓超(1873-1929)<sup>26)</sup>らの呼びかけにより1898年2月に開学した華僑の子弟を対象とした学校(現・横浜山手中華学校)で、鮑桂娥の父・鮑滔宗も設立に関わったとされる。後に鮑桂娥の夫となる鄭錦(1883-1959)は、国立北京美術学校(現・中央美術学院)の初代学長となる画家、美術教育者で、13歳から梁啓超一行と日本で3年間ほど旅を続けていた際、大同学校に在籍した。鮑滔宗は鄭錦を高く評価して、娘である鮑桂娥を彼と婚約させ、女子美在学中の1910年に結婚。今日、鄭錦を紹介したネット情報では、妻の鮑桂娥は「入讀日本女子美術大學，成為何香凝師姐(女子美術大学に入学して 何香凝の先輩にあたる)」と記されている<sup>27)</sup>。実際には何香凝が11歳ほど年長になるが、入学時期が2年近く早い鮑桂娥が女子美での先輩であることには違いない。

鮑桂娥は女子美に通算4年在籍しており、孫文や何香凝らと同じ広東省出身で、父鮑滔宗が大同学校を通じて孫文とも関りがある点でも、鮑桂娥と廖氷筠、何香凝の3人に接点があったとみるのが自然であろう。当時、中国同盟会が中心となって革命に向けた機運が東京を中心に高揚拡大していた中で、何かにつけて華僑を含む様々な中国人ネットワークが介在していたとされる。そうであるならば、鮑桂娥は、廖氷筠、何香凝が女子美に入学するにあたり、女子美に関する情報の提供者として、重要なキーマンであった可能性がある<sup>28)</sup>。



図1 田中頼璋筆《猛虎一聲図》

## 7. 日本画との出会い・田中頼璋

何香凝は、回想録『我的回憶』に、女子美で学んだ端館紫川を「我絵画的老師」、同時に自らを「田中頼璋の学生」と記し、それに続けて頼璋の画塾に週2回通い、虎や獅子の書き方を学んだこと(図1)。当時、日本の文化界は日中の文化交流を重視しており、何香凝が中国人留学生でしかも女性であったことから、頼璋から大変熱心な指導を受けた、と述べている<sup>29)</sup>。また、娘の廖夢醒は、「母は心から田中頼璋先生を尊敬し、田中先生が筆を入れてくれた画稿はみな大切に保存していた。これらの作品は日本軍による陥落直前に急いで香港から脱出した際に散逸してしまった」と回顧している<sup>30)</sup>。

『学籍簿』から、何香凝は1908(明治41)年2月から頼璋の画塾に通うようになったと判明するが、週2回の塾通いが女子美時代にも継続していたかどうか、回想録からは判然としない。しかし、日本で最初に絵を学んだ師として、さらに学校での集団指導に比べ、塾でのマンツーマン(one-and-one)に近い指導を受けたことで、田中頼璋への信頼感が生まれたことは想像に難くない。

ちなみに頼璋の画塾の名は「天然画塾」と言い、東京市下谷区上野桜木町22番地(現・東京都台東区上野桜木町)、東京美術学校と道路を挟んで隣接する場所にあった(図2)。



図2 東京の画室(天然画塾)で制作中の田中頼璋(左)

廖承志の回想に、何香凝が「東京上野の美術学校」に入学したとするのは、頼璋の天然画塾を女子美と混同したものとと思われる。

では、女子美に先駆けて、何香凝が田中頼璋に日本画を学ぶようになったきっかけとは何か。まず、日本画の学習が、女子美での刺繍以下、手芸的要素の強い家政系学科の兼修のように、革命運動に関わって選択されたものではないことは確かであろう。日本画の源流をたどれば、技法や表現において中国絵画と類縁関係にあり、その学びが軍事利用に結び付くとは到底思えない。

何香凝は、息子の廖承志が言うほどに、絵に対してまったくの素人ではなかった。日本留学以前、結婚間もない時期に画家伍懿庄に絵の手ほどきを受けた夫・廖仲愷から絵の知識を学び<sup>31)</sup>、また後に中国で新国画運動を展開した嶺南画派を代表する高剣父(1879-1951)からも絵を学んだ<sup>32)</sup>という。その段階では、詩書画に親しむことが教養人の嗜みとされる中国社会の伝統的通念に沿った、いわば稽古事の一つとしての学びであったと想像される。その下地があったこそ、何香凝は絵画に興味を抱き、日本留学時に中国絵画と似て非なる「日本画」に出会って更なる魅力を感じ、稽古事から一線を画して、自ら進んで田中頼璋に絵を学ぶようになったのではなかろうか。

加えて、田中頼璋を師に選んだ理由については、同じく中国人留学生として田中頼璋に学んだとされる高奇峰(1889-1933)の存在が関係していよう。

高奇峰は、何香凝が日本留学前に中国で絵を学んだとされる高剣父(1879-1951)の弟であり、後に兄とともに中国広東地方で中国画の改革派として活躍した嶺南画派の一人で、兄の高剣父に連れられて日本に留学した経験をもつ。その時期について、李偉銘は、高剣父の日本留学時期を1906年初春から1907年暮か1908年初めまで、高奇峰に関しては少なくとも1906年秋から兄と同じ1907年暮れか1908年初めまでではないかと推定している<sup>33)</sup>。

高剣父と廖仲愷・何香凝夫婦は旧知の間柄で、留学時にも親しく過ごし、高奇峰ともども孫文が立ち上げた同盟会入会を果たし、革命同志としても親しく交わった。高奇峰は留学時の18歳前後に、何香凝に僅かに先駆けて田中頼璋の天然画塾で学んでいたことになる。とすれば何香凝が高奇峰から田中頼璋に関する予備知識を得ていたものと思われる。

なお、高奇峰と田中頼璋を結び付ける糸口ははっきりと

掴めず、ひとまず兄高剣父の人脈によるものと見ておきたい。

以下に、田中頼璋のプロフィールを紹介しておく<sup>34)</sup>、1866(慶応2)年、島根県生まれ。早くから画家を志したが、都に出ることなく地元の中国地方で長らく旅絵師として生計をたてていた。1902(明治35)年、36歳で上京し、川端玉章に入門すると、同年11月の日本美術協会展で「猛虎図」が一等賞となり、一躍、彗星のように日本美術界に頭角を現す。以後、数々の展覧会で受賞を重ね、1907年41歳の時には明治天皇の前で初めて「御前揮毫」(天皇の前で絵を描くこと)を命じられる名誉に浴するまでになった(御前揮毫は都合3度)。

同年、文部省主導の官制展覧会「文展」(文部省美術展)が開催されると、頼璋は翌1908年の第二回文展から毎年のように出品して入賞・特選を重ね、さらに1919年以降、文部省に代わって帝国美術院が主導する「帝展」(帝国美術院展)でも活躍を続けた。1923(大正12)年の関東大震災で被災後、妻の実家がある広島に移り住み、以後、帝展のほか広島島の画壇で門弟を指導しながら作画を続け、1940(昭和15)年、74歳の生涯を閉じた。

何香凝が頼璋に入門したのは、頼璋が初めて御前揮毫を行った翌年のことで、中央画壇での鮮烈なデビューから7年後、頼璋41歳、何香凝29歳の時であった。何香凝が頼璋を「日本皇室画師」と記すのは「御前揮毫」を行ったことを指すのであろう。

また、何香凝が女子美に入学した1909(明治42)年の秋に師の川端玉章が開いた川端画学校で教授を務めるようになった。

## 8. 端館紫川と川端玉章

何香凝が女子美で師事することになった端館紫川(1855-1921)と田中頼璋(1866-1940)は、当時、日本画壇の大家として名を馳せた川端玉章(1842-1913)の画塾天真社で学んだ兄弟弟子の関係にあり、紫川が11歳年長の兄弟子にあたる。また、川端玉章自身も、何香凝が入学する前年まで、女子美で日本画の教授を務めていた<sup>35)</sup>。つまり何香凝にとって、川端玉章一門の人的ネットワークのもとで、日本画を学んでいたことになる。以下に端館紫川、川端玉章の簡単なプロフィールを紹介しておく<sup>36)</sup>。

端館紫川は、1855(安政2)年、伊勢国宇治山田(現三重県伊勢市)の神職の家系の出身。幼い時から同郷の絵師に

学んで、19歳で伊勢神宮の絵師となる。1885(明治18)年30歳で上京後、川端玉章に入門。また、アーネスト・フェノロサが新しい日本画創造活動の場として設けた鑑画会に参加し、同会の展覧会で作品がたびたび受賞するなどして評価を得た。1887年、皇居造営にあたって絵画制作に従事。1895年の内国勸業博覧会でも受賞、1904年セントルイス万博にも出品した。熟達した筆致による山水、花鳥画を得意として数々の展覧会で入選・入賞を果たし、1904(明治37)年から1919(大正8)年頃まで女子美術学校の日本画教師を務めた。1909(明治42)年、川端画学校開校にあたって川端玉章の弟子として田中頼璋とともに教授となって指導にあたった。

川端玉章は、1842(天保13)年、京都生まれ。幼いころから絵の才能を見込まれ、11歳で円山派の絵師に入門。明治維新に先立つ1866年に江戸(東京)に移住し、明治政府が開いた内国勸業博覧会や内国絵画共進会などの展覧会で賞を得てその実力が認められて、東京美術学校開校にあたり円山四条派の教師として迎えられ、1890(明治23)年に教授となった。1893年にはシカゴ万博にも出品。また1896年帝室技芸員、1897年古社寺保存会委員となる。また1907年の第一回文展から審査員もつとめるなど、日本美術界の重鎮として活躍を続け、1913(大正2)年死没。

玉章は、明治時代の東京画壇にあって、京都を発祥とする江戸時代以来の伝統画派、円山四条派の継承者として重んじられ、1878(明治11)年画塾天真社を開いて後進の指導にもあたり、紫川、頼璋ら多くの弟子を育てた。そして東京美術学校教授の傍ら、1900年の開校以来、何香凝が入学する前年の1909年3月まで女子美術学校の日本画教師を兼任で務め、女子美を退いた1909年9月小石川に川端画学校を開校した。

何香凝が田中頼璋の画塾に学び、その後同じ玉章門下で兄弟子の端館紫川が指導にあたる女子美に入学したことは、玉章一門のもとで日本画の研究を継続し、更なる深みを目指そうという思いを抱いていたことを物語る。加えて、何香凝が入学した年から女子美では刺繍や縫製等、家政系学科の技術も学ぶことが可能となった。何香凝にとって、革命に供される軍旗以下、武装蜂起用の関係物資の制作に携わるようにとの孫文の要求にも応えられるとみて、女子美への入学を果たすに至ったのだろう<sup>37)</sup>。

田中頼璋、端館紫川の二人が、何香凝に伝えようとした

のは、基本的に川端玉章ゆずりの教えであった。その基本は、18世紀に京都で活躍した円山応挙(1733-1795)および呉春(1752-1811)の画風を合わせた円山四条派の流れをくむ日本画の伝統様式で、主として「写生」を重視する円山派の筆法から明治時代「写生派」とも呼ばれた画風である。

対象を様々な角度から客観的に描写する写生の技法を基礎とし、風景、人物、花鳥、動物等、日本絵画における伝統的な画題を、装飾性豊かに描き出して、明治時代を通じて高い人気を誇ったが、次第に日本画界にも西洋画の影響や革新の機運が沸き起ると、その保守的立場から「旧派」と呼ばれるようになる。川端玉章亡き後、田中頼璋、端館紫川らは、新時代の到来にあたってもお、時代を超えた芸術の普遍性があると信じる「旧派」を代表する画家として、日本近代美術史上に足跡を残すこととなった。

## 9. 帰国後の何香凝

『学籍簿』には、何香凝は女子美を1911(明治44)年3月に卒業したと記されるが、卒業式を迎える前に2人の子供を連れて、すでに帰国していた廖仲愷と合流したようである。同年11月「辛亥革命」が起こり、翌年2月宣統帝(溥儀)の退位によって清朝は滅亡。古代以来続いた君主制は廃され、新たに共和体制をとる中華民国が誕生して一旦、臨時大總統に孫文が就任した。しかしその後も革命は貫徹されず、中国各地で軍閥も加わって統一政府が存在しない状況に及ぶ中、孫文は中国同盟会を中華革命党、さらに中国国民党と改称して中国統一を図る国民革命を目指したが、1925年3月病のため志半ばにして59年の生涯を閉じた。さらに何香凝を襲った不幸はこれに止まらず、同年8月、国民党左派の指導者となっていた廖仲愷が、何香凝の目の前で凶弾に倒れる悲運に見舞われる。日本留学以来、祖国のために共に革命運動に奔走した最愛の同志を失った何香凝の悲しみは、計り知れない。

しかし、何香凝は悲嘆に耐え、孫文、廖仲愷の遺志を継いで、終始一貫した政治姿勢で新国家建設に力を注いだ。女性運動の代表としての国民党中央婦女部部长のみならず、中国国民党中央委員の要職も務めたが、国民党内は右派左派の対立が収まらず、混乱が続いていた。そうした中、何香凝は、日本で学んだ絵の道に、政治とは別に精神的充足を求めようとしたのではなかったか。



何香凝にとって、日本留学を終えて帰国早々におきた辛亥革命と、その後の混乱期にはまともに絵筆も取れない状況であったろう。辛亥革命の後の第二革命の失敗で、1913年に孫文と前後して何香凝夫妻は再び渡日していたが、その後再び中国に帰ってからの1920年代には、孫文と廖仲愷の死を挟んで、中国同盟会以来の同志であった画家・経亨頤（1877-1938）や陳樹人（1883-1948）、詩人の柳亜子（1887-1958）らとの交流が散見され、とくに1920年代後半には彼らと詩画の合作や美術展を行うことで、何香凝が中国の伝統的な文人画や山水画へと傾倒していったことが指摘されている<sup>38)</sup>。

そして1928年には、国民党の内部分裂から国民党内の職務を辞し、翌1929年11月、何香凝は夫の名を冠した仲愷農工学校設立への寄付を名目に、東南アジアに出向いて書画300点を集めた「書画会」で絵を売って費用を捻出し、さらに自身の絵も売ってそれらを旅費にしてパリ、ベルリンとヨーロッパで2年近く滞在し、西洋文化に触れながら、アトリエで画作するなどの、初めてとあってよい自由な空気を満喫する時間を得たとされる。何香凝にとっては、絵を売って生計を立てる画家としての経験は、何よりその後の画家として生きる幸福と自信につながっていったのではなかろうか。

そしてパリ滞在中の1931年9月満州事変が勃発し、急ぎ帰国の途に就いた何香凝は、当初、国民党や政府と一線を画し、一国民による抗日救国運動の一環として、救護隊を組織して反日救護活動に従事すべく、その費用捻出にあたって、何香凝は画家らに呼びかけ、各地で抗日書画会を開催した。ここでも画家一個人として祖国に貢献しようとする姿勢は、終始一貫したものといえ、日中戦争が激しさを増す中でもその信念を貫き通した。そして日中戦争終結後の1940年代後半には、孫文と廖仲愷が目指した政治理念を継承する「革命老人」として、再び政治の世界に呼び戻され、さらには1949年中華人民共和国建国時には民主党派の一つ中国国民党革命委員会の主席として政府に参画。中央人民政府委員、全国人民代表大会常務委員会副委員を始めとして数々の政府の要職を歴任した。また、1960年には中国美術家協会主席に就任している。1972年9月1日、何香凝は94歳で永眠。生前の希望で南京郊外にある夫・廖仲愷の墓に葬られた。

## 10. 結び

本稿では、女子美を中心とした何香凝の日本留学時代の状況について、検証を行った。その結果、何香凝の女子美入学にいたる経緯に関しては、以下のような背景が確認できた。

1. 孫文は、中国国内で武装蜂起を組織するにあたって、軍旗や住民への告示用のデザイン、軍票の図案などを企画制作する人物を求めていた。
2. 女子美は創立以来、「芸術による女性の自立」を目的に、日本画等の美術・工芸系学科と刺繍や裁縫等手芸的要素の強い家政系学科を併存させた美術学校であった。
3. 女子美には、何香凝入学の2年前から華僑の子女（鮑桂娥）が在籍しており、孫文ら革命同志の中では中国人ネットワークを通じて女子美の情報が共有されていたとみられ、何香凝就学の前年には親族の一人・廖水筠が刺繍科撰科普通科に入学していた。
4. 何香凝が入学した1909年には、「日本画撰科高等科」において、日本画の学習のみならず、刺繍や縫製等手芸的家政系の実技の修得も可能なカリキュラムが用意され、孫文の指示に応じた技術の修得が可能な条件を満たしていた。

以上はしかし、あくまで孫文を司令塔として、何香凝がその指示に従ったとする、従来の観点にたった解釈となろう。ここに抜け落ちているのは、やはり「日本画」を同時に学んでいる何香凝の、心の内である。

廖承志が「もともと、母が絵かきになるなど、彼女自身、思ってもいなかった」といい、孫文の要請を受けて美術学校に入ることになると、「また、父も熱心に絵の勉強をすすめたので、彼女は本式に学び始めたのである。絵の修業をする一方、母は武装蜂起用の軍旗のデザインに参画したり、その刺しゅうまでやった。このときから、母はそれまで予期しなかった絵を描くようになったのである」との書きぶりは、前述したように、事実とはやや相違する。女子美に入学する以前から、何香凝は田中頼璋から日本画を学んでいたことを、どのように理解すべきか。

何香凝は、息子の廖承志が言うほどに、絵に対してまったくの素人ではなく、日本留学以前から絵を嗜んでいた。しかしその段階では、詩書画に親しむことが教養人の嗜みと

される中国社会の伝統的通念に沿った、いわば稽古事の一つとしての学びであっただろう。その下地があつてこそ、何香凝は絵画に興味を抱き、日本留学時に中国絵画と似て異なる「日本画」に出会って更なる魅力を感じ、稽古事から次第に一線を画して、自ら進んで絵を学ぶようになったのではないか。そして何香凝が本来持ち合わせていた絵の才能を呼び覚まし、まさに美術の開眼に導いたのが田中頼璋であり、端館紫川を中心とする女子美のアカデミズムであつたと思われる。

しかし、直ちに絵に専念することもできず、革命運動に身を投じた何香凝は、その埋もれ火のような絵に対する情熱を消し去ることはなく、過酷ともいえる運命のもとで、その炎を時にしなやかに、また力強く、灯し続けたのであろう。

何香凝の画家としての原点は、やはり日本での留学経験にあつたと考えたい。そして何より、何香凝の絵には、芸術に対する確たる信念をもった向き合い方が感じられる。それは、新時代の到来にあつてなお時代を超えた芸術の普遍性があることを伝えようとした師の田中頼璋と、相通じるものがあるように思えるのである。

## 謝辞

本稿を成すにあたり、下記の関係機関ならびに写真提供者、女子美術大学の職員の方々にお世話になりました。ここに末筆ながら謹んで感謝の意を表します。(敬称略)

公益財団法人 頼山陽記念文化財団

田中謹之助

石橋悦子

女子美術大学国際交流センター・河野瑠瑠

同 図書美術館グループ・川上勇

同 歴史資料室・高橋直子

## 註

- 1) 孫倩「清国人の日本留学に関する一考察 — 1890年から1910年まで —」(『社会学論集』Vol.18、2011年9月、pp.188-203)
- 2) 周一川『中国人女性の日本留学史研究』(国書刊行会、2000年、p.179)
- 3) 年齢の表記に関しては、中国と日本では「数え年」と「満年齢」による齟齬が発生する可能性があるため、本稿では基本的に満年齢で統一することとした。
- 4) 拙著「何香凝と女子美術大学」(中国訳・河野瑠瑠『何香凝美術館館刊』総第2期、2020年5月、pp.24-35)。
- 5) 何香凝に関しては、王曉松「何香凝の芸術家人生」(女子美術大学歴史資料室編『女子美術大学と日本の近代 女子美

- 110年の人物史』女子美術大学、2010年、pp.299-320)、竹内理樺「何香凝の芸術活動 — 1930年代における美術を通じた抗日救国運動を中心に」(同志社大学言語文化学会『言語文化』15-4、2013年、pp.359-389)、同「何香凝と日本留学」(王敏編『日本留学と東アジア的「知」の大循環』三和書籍、2014年、pp.263-285)を参照した。
- 6) 息子の廖承志は、父母のなれそめについて、廖仲愷は父親の遺言で「纏足」をしていない女性を妻に求めており、何香凝は幼少から中国女性の風習である纏足を拒み続けたので、2人はなんら煩雑な手続きもなく、めでたく結婚したという有名なエピソードを紹介している。廖承志「我的母親和她的画—為何香凝中国画遺作展覽而作」(『人民日報』1979年2月14日)《訳出「わが母何香凝とその絵」(『人民中国』1979年5月)》
- 7) 阿部洋『中国の近代教育と明治日本』(福村出版、1990年)
- 8) 何香凝「敬告我同胞姊妹」1903年6月25日(尚明軒・余光編『双清文集』下巻、人民出版社、1985年、p.1)
- 9) 何香凝「我之回憶」1961年10月6、7日(註8前掲書『双清文集』下巻、p.906)
- 10) 竹内理樺「何香凝と日本留学」(王敏編『日本留学と東アジア的「知」の大循環』三和書籍、2014年、p.266)
- 11) 竹内理樺、註10前掲書(p.267)《竹内論文は中国国民党中央委員会党史委員会『革命文獻』第二輯(中央文物供給社、p.55)および尚明軒『何香凝伝(増訂版)』(民族出版社、2004年、p.38)に依拠》
- 12) 現在の津田塾大学の前身・女子英語塾(津田梅子が創立)、東京女子医科大学の前身・東京女医学校(吉岡弥生が創立)も、女性の自立、社会進出を促すことを目的の一つに掲げた各種学校として、女子美と同じく1900年に設立された。
- 13) 女子美の学校史に関しては、主として『女子美術大学百年史』(女子美術大学、2003年)参照。
- 14) 拙著 註4前掲書。
- 15) 「女子美術学校設立の趣旨」に「女子に向て美術教育を施し彼等をして其学習せし所を以て彼等の工芸手工その他日常の業務上に適応せしめて因て彼等が自活の道を講じ得るに資し」とある文章をもって、女子美は「芸術による女性の自立」を建学の精神の3本柱の一つに掲げている。
- 16) 同時期の日本画本科高等科のカリキュラムは以下の通り。

### 1学年目

実技(臨画、写生、新案)	週25時間
芸用解剖(骨学)	週1時間
図学(幾何画法)	週3時間
倫理学(人倫道德の要旨)	週1時間
国語(講読、作文)	週2時間
英語(訳読)	週2時間
	計34時間

### 2学年目

実技(臨画、写生、新案、図案)	週26時間
芸用解剖(筋学)	週1時間

図学(透視、投影)	週2時間
美術史(本邦美術史)	週2時間
倫理学(諸家学説)	週1時間
英語(訳読)	週2時間
	計34時間

### 3学年目

実技(臨画、写生、新案、図案)	週26時間
芸用解剖(靱帯及作用)	週1時間
図学(透視、投影)	週2時間
美術史(西洋美術史)	週2時間
美学(諸家学説)	週2時間
倫理学(諸家学説)	週1時間
	計34時間

- 17) 廖承志「我的母親和她的画—為何香凝中国画遺作展覽而作」(註6前掲書『人民日報』)《訳出「わが母何香凝とその絵」》
- 18) 何香凝「我的回憶」(註8前掲書『双清文集』下巻、p.915) 原文「起義部隊所用的旗幟符号、有一些就是我在孫先生的指導下描繪和刺繡縫制的」
- 19) 何香凝の父親の名前(字・あざな)について、『学籍簿』には「炳垣」と記載しているが、「炳恒」「炳恒」とするものがある。また、何香凝の「学籍簿」を初めて紹介した『女子美術大学八十年史』「何香凝」(女子美術大学、1980年、p.454)には「何炳垣三女」と記すが、これは誤植で「何炳恒之女」が正しい。「女子美以前の何香凝」で記したように12人の兄弟・姉妹のなかで9番目とすれば、6女から9女の間の生まれとなる。
- 20) 周一川 註2前掲書(pp.176-199) 参照。
- 21) 周一川 註2前掲書(pp.55-58)
- 22) 『女子美術大学八十年史』「何香凝」(女子美術大学、1980年、pp.453-458)
- 23) 房樺「何香凝留日史事考察」(『美術』2019年第4期、pp.102-109)
- 24) 『学籍簿』によれば、廖冰筠は明治32年(1899)4月生まれで、「寄留所」には何香凝と同じ「府下淀橋町字柏木三百五十二番地」が記載され、同居していたことが知られる。なお1908年時の撰科普通科は「小学校尋常科卒業以上の学力を有し年齢14歳以上」を入学許可にしていたが、例外もあったことになる。
- 25) 周一川 註2前掲書(p.183)
- 26) 清末・民国初期において啓蒙思想家、ジャーナリスト、政治家として活躍。
- 27) 澳門記憶 鄭錦([https://www.macaumemory.mo/entries\\_65612719f49544d2bdc0cb5c5a833bfe](https://www.macaumemory.mo/entries_65612719f49544d2bdc0cb5c5a833bfe)、2020年9月16日閲覧)
- 28) 21歳で画家・鄭錦と結婚した鮑桂娥が革命運動に参画していたかについての情報は、管見の限り得られておらず、後考に俟ちたい。
- 29) 何香凝「我的回憶」(註8前掲書『双清文集』下巻、p.915)
- 30) 廖夢醒「我的母親何香凝」『回憶与懷念——紀念革命老人

何香凝逝世十周年』(北京出版社、1982年、p.121) 本稿では田所竹彦氏の訳文を引用《田所竹彦「革命の道を大脚で闊歩した何香凝」(『近代中国七人の猛女たち 西太后から江青まで』里文出版、2005年、p.73)》

- 31) 竹内理樺「何香凝の芸術活動——1930年代における美術を通じた抗日救国運動を中心に」(同志社大学言語文化学会『言語文化』15-4、2013年、p.362)《竹内論文は陳此生「革命母親何香凝先生」(回憶与懷念—紀念革命老人何香凝逝世十周年)北京出版、1982年、p.141)および尚明軒『何香凝伝』北京出版社、1994年、p.17)に依拠》
- 32) 鶴田武良「近代中国画家伝5 嶺南三家—高劍父・高奇峰・陳樹人 新国画運動の先駆者たち」(『季刊水墨画』No.24、1983年4月、p.47)《鶴田論文は、簡又文「革命画家高劍父—概論及び年表」(『傳記文学』第二一卷六期、第二二卷二期、同三期 台北傳記文学雜誌社、1972年)に依拠》
- 33) 李偉銘「高劍父“留学”日本考」(『伝統与変革：中国近代美術史事考論』商務印書館、2015年、pp.46-47「補記」)
- 34) 田中頼璋に関しては、主に『頼山陽史跡資料館平成26年度特別展 田中頼璋とその一門』(頼山陽記念文化財団、2014年)を参照した。なお田中頼璋は、玉章入門以前「豊文」「芳文」と号し、玉章門下となって「頼璋」、玉章没後に師を敬慕して「玉」と「章」を合わせた「頼璋」の雅号を用いた。
- 35) 『女子美術大学八十年史』『女子美術大学百年史』では歴代教員名に川端玉章の名が漏れているが、女子美開学初期の「女子美術学校規則」、渋谷操(1904年女子美卒)「思い出」(『女子美同窓会誌 女子美術』No.6、1955年)などから、開校以降1908年度まで女子美の日本画教師を務めていたことが知られる。
- 36) 端館紫川、川端玉章の事績は神奈川県近代美術館編『近代日本美術家列伝』(美術出版社、1999年)参照。
- 37) 1909年当時には、奎文女子美術学校、日本女子美術学校など、女子を対象とする美術学校が女子美の他にも存在していた。
- 38) 「帰国後の何香凝」での何香凝の作画活動に関しては、おおむね竹内理樺「何香凝の芸術活動——1930年代における美術を通じた抗日救国運動を中心に」(註31前掲書『言語文化』、pp.359-389)参照。

## **The significance of Ho Hsiang-ning's study abroad in Japan: Focusing on the encounter with "Joshibi"**

INAGI Yoshikazu

Since its foundation in 1900, Joshibi University of Art and Design (Joshibi) has accepted many international students from China and has produced many graduates. One of them is Ho Hsiang-ning, who survived the turbulent 20th century of China, as a revolutionary / politician and a painter / artist.

This article examines the significance of her studies at Joshibi, during which she spent more than eight years in Japan in her mid-twenties, in defining her life at the age of 94.

In 1909, Ho Hsiang-ning enrolled the Japanese Painting Department of Joshibi, as Sun Yat-sen had asked her to design and produce military flags and other military items for the armed uprising in China. She had been learning Japanese painting privately with Tanaka Raisho for a year before she entered Joshibi. Fortunately, from 1909 at Joshibi, she was able to learn not only Japanese painting but also handicraft techniques such as embroidery and sewing to meet Sun Yat-sen's demands. Even before enrollment, Joshibi had a Ho Hsiang-ning cousin and a child of an overseas Chinese and Joshibi was a familiar school for her. At Joshibi, she learned Japanese painting with Hashidate Shisen. Tanaka Raisho and Hashidate Shisen were pupils of Kawabata Gyokusho, the great Japanese painter of the time.

Before coming to Japan to study, she had learned painting in China as a taste of a cultured person. When she came to Japan to study, she encountered Japanese paintings, which were completely different from Chinese paintings, and was so fascinated by them that she volunteered to learn them. Tanaka Raisho brought out her talent for painting and her education at Joshibi, led by Hashidate Shisen, encouraged her to do so. Despite the harsh fate of her revolutionary career, Ho Hsiang-ning never lost the passion for painting that she had acquired during her studies in Japan.